



概要

私たち2学年有志3名は、9月10日～11日に北海道札幌市で行われた「高校生世界津波の日サミット in 北海道」に参加してきました。高校生世界津波の日サミットとは、たくさんの国から高校生が集まり、その国での防災技術や防災への考え方、アクションプランなどを話し合う会議です。会議以外にもレセプション、植樹会など海外の高校生と交流してきました。

At the group meeting (Tsuyoshi Usami)

We first began by introductions and icebreakers. What surprised me by most was how willing a lot of people were to simply talk to each other. It was quite clear that English wasn't most people's native language, and yet they were very confident in the way they spoke, and very easy to talk to. The icebreaker went like this. A card with a picture of an animal or insect was shown to everyone excluding one person. Then the people that can see the picture makes noises that the animal on the picture makes in their language or in English. It caused a lot of confusion and fun because animals sound like in differently in different languages, say for example, a pig goes "oink oink" in English, but goes "ブーブー" in Japanese. Another interesting things was that some students had never seen cicadas before so they didn't know what they sounded like!

Our presentation was about the use of names for places as a marker for possibility of disasters. It is quite useful and reliable in Japan, but seems to vary from country to country.

A student from Nauru told us that there is a place that literally means "kill" in Nauru. They told us that the place is known for a lot of accidental deaths. However, a French student told us that a lot of places have the word "l'eau" meaning water in their names, and yet has nothing to do with water.

During the actual discussion, one key point was disaster prevention education and telecommunication technology. A lot of students were very impressed with the robust disaster education of Japan. Especially the "OHaShi (おはし)" protocol for young children during earthquakes.

Overall this meeting was every eventful and fun. It was very exciting to talk to foreign students with different backgrounds and have debates with them. It broadened my horizon greatly. I would like to use this place to thank everyone involved in this project. Thank you.

レセプション (村上明優里)



2日目の夜には立食形式のレセプションパーティーが行われました。全参加者が集まっていたので、分科会のグループが違う高校生とも交流をすることができました。このレセプションの間は、全員が事前に配られたこのサミットのオリジナルの法被を着用していたので、海外の高校生に法被の紹介をしながら日本の文化について話すことができました。また、ステージでは日本の高校生がなぎなたのパフォーマンスやよさこいを披露していて海外の高校生はとても楽しんでいました。逆に、海外の高校生は自分の国の伝統衣装を身に付けて伝統的な歌やダンスを披露していました。お互いの国のことを知りながら、有意義な時間を過ごすことができました。そして仲良くなった色々な国の高校生とは一緒に写真を撮り、連絡先を交換してより距離を縮められました。海外の高校生だけでなく他県から来ていた日本の高校生との会話も盛り上がり、レセプションの時間は本当にあっという間に感じました。



今回の開催地である北海道にちなんで、会場の入り口には大きな雪だるまが飾られていました。本物の氷で作られていて、参加者は皆立ち止まって雪だるまを触ったり、写真を撮ったりしていました。特に、雪の降らない地域から来た海外の高校生はとも興味を示していました。



編集後記 (岩倉侑)

最後に突然重い話をしてしまうことになるが、失礼する。3.11で命以外のすべてを失った私は、このサミットでようやく「伝承」という、生き延びた者の義務をやっと果たせたと思う。いや、別に何かを失った経験していないなら行く意味がないと言っているのではない。一人一人、あの日から感じたことはあるだろう。津波の存在すらよくわかっていない海外の高校生にそのことを伝えるために**参加する意義**はある。74回生から、志を持った方が現れることを期待する。なんだって、英語が不安？大丈夫、**英語の校内偏差値45の私でもなんとかあった**のだから。やる気があればどうにかなる。「英語で恥かきたくないし…」といったくだらんプライドよりも、**欲張って多くの命を救うきっかけとなるために**、どうかお願いします、勇気を出してくださいまし。

☆お知らせ☆

このサミットで知り合った、東京学芸大学附属国際中等教育学校の矢沢竹之進くんから、彼が作成した原発事故のドキュメンタリー映画(50分ほど)を上映してほしいとの依頼を受けて帰ってきました。北海道からの帰り、新千歳空港で2時間も話し合って彼の思いが熱いことをよく感じました。彼は、全国の高校に自分の映画上映を依頼して回っています。LHRの時間を提供していただけないかと思いましたが、厳しいようだったので、ひとまず、私が代理上映するという形で個人的にお見せしようかと考えています。反響次第では、放課後企画という形で全校にむけて上映会を開くかもしれません。興味のある方は、2-1 岩倉までどうぞ。